

ライバル社の勢いが止まらないので、  
体当たりレビューで自社製品の売上を伸ばします！

## 体験版

無意識ドS課長＋鬼畜系優男係長×不憫若手社員

攻め１：鬼ヶ原（おにがはら）課長

攻め２：碓氷（うすい）係長

受け：峰平（みねひら） 若手社員

要素：玩具、開発、３Ｐ

パソコンに表示されるのは、マーケティング部から送られてきた最新の売上ランキング。同時期に販売を開始した他社製品も並ぶこの表には、このところ常にトップに躍り出る会社がある。

「クソ！また1位はSIMURA製か！」

思った通りでもあるが、そうはなってほしくない気持ちもあるせいで、悔しさからついデスクを叩いてしまう。渾身の台パンは、周りにいた部下たちを委縮させた。だが、それでも気を静められない。「SIMURA」の6文字が、何と憎いことか。この会社の製品が世に現れてからは世界が変わった。それまでは業界最大手のわが社が売り上げトップから転落するなど、アダルトグッズ業界で働く全ての人間が想像もしなかっただろう。

弊社はアダルトグッズ専門の会社ではあるが、30年の歴史をもつ老舗だ。バラエティに富んだラインナップ。幅広い価格帯やニーズに答えて、市場ではシェアを独占していたと言っても過言ではなかった。そこに突如現れたのが、無名のブランド「SIMURA」の製品だ。

まず世間の話題をかつさらっていったのは、突いた場所の感度を高める棒という、とんでもない製品だった。なんだそれは、現実にもそのようなことが起こるわけがないと、当初我々の会社は彼らの製品を舐め腐っていた。それが何と、マニャックなSNSでは魔法のようだと動画まで上がる始末で、いつのまにやら売り上げランキングではうちの会社を追い抜いていた。

それでもまだ1製品。所詮ぽっと出の会社のまぐれあたりだと構えていたら、対象者の男性器と感覚をリンクさせるバイブという、またしても意味不明なグッズの販売が始まった。この商品に関しては、既にSIMURA製商品のファンも出来上がっていたので、瞬く間に注文が殺到したらしく、今では入手困難な限定品になる始末だ。慌てて弊社の開発部門も彼らの製品を真似ようとしたものの、あまりにもイレギュラーな製品たちは、模範することなど到底無理な代物だった。独特

な世界観に魅了された市場は、既に次のSIMURA製を心待ちにする人が続々と誕生している。

「で、今回はなんだ？相手の射精を吸収し、好きな時に放出することを可能にしたコックリング！？ありえん、そんなことが出来てたまるか！しかも今度は限定受注生産！？第一次どころか追加募集も終わってるじゃねえか、クソが！」

バン、と忌々しい製品ページを睨みながらデスクを叩く。倒れたペン立てからボールペンが床に転がっていったのを、部下が恐ろしいものを見る目で見ている。だが、苛立ちもするだろう。なんせSIMURA社の憎い所は、独自の製品技術だけではないからだ。

アダルトグッズの会社のページなので、うちの会社もそうだが、あまりホームページそのものに金をかけない傾向があると思う。見やすくシンプルな作りにして、経費を削った分を開発費に回したりすることが多い。そんな中で、SIMURA社はページの作り込みも素晴らしい。彼らのグッズはそれなりに値が張るのだが、巧みな印象付けで、高級感すら感じさせている。そして何より、ネットに上がった口コミをせっせと紹介しては、商品を使用した人たちの声を消費者に届けて、更に売り上げを伸ばしている。特に自分たちから売り込みはしていないそうだが、有名なアダルト系の配信者たちは、発売と同時に喜んでレビュー動画を上げていた。彼らが「忖度なしレビューします！」「プロモーション関係ありません！」と声高らかに言うものだから、一般消費者は余計に購買意欲を掻き立てられているはずだ。

本来これだけ話題になれば、他社がこぞって真似をする。だからオリジナリティがなくなるものなのだが、SIMURA製はどう転んでも類似品すら作れない。あまりにも個性的だ。きっとそのうち、特許も通るだろう。

「なんでこんな製品が次々出てくる...！？SIMURAには化け物が働いてるのか？  
どう考えても人間にできることじゃないぞ」

怒りを乗り越すと、次は諦めのため息が出てくる。うちも商品には自信はあるが、彼らは次元が違う。一体どんな優秀な開発者を抱えたら、こんな製品が生まれるのだろうか。

聞いた話によると、SIMURA社はかなり少数精鋭でやっていて、基本的には天才的な発明家と、広告も流通も全部やる全方向優秀なマーケターのコンビで回しているらしい。この人間離れした技を羨む企業は後を絶たず、開発者の引き抜きはもちろん、マーケター側にも散々交渉がいつているとの噂だ。しかし彼らは腰が重く、かつ情報の一つも流れてこない。つまり、外部から彼らの技術を盗むことはほぼ不可能というわけだ。

そんな中でも、俺たち営業は無理難題を押し付けられる。簡単に言えば、1位奪還だ。だが、最初の棒の時期に手を打てていたならまだしも、もうSIMURAの名が通った今では更に難易度が増している気がする。マーケティング部ではできないことを、営業に丸投げしているのではないのか。そう思うと今度は再び怒りがこみ上げてきて、チッと舌打ちが零れた。物々しいオーラを放つせいで、フロアには俺を遠巻きに見る社員ばかりになる。

「簡単に言ってきやがって！そもそもお前らの見込みが甘かったからこんなことになったんだろうが！今さら1位になるなんて無理なんだよ！」

「も～、鬼ヶ原課長ったら。売上不振だからって物に当たらないでくださいよ～。空気悪くなるんですけど」

けれども、物怖じしないやつも稀にいる。のんびりとした口調で俺の頭をファイルで叩いてくるのは、1年ほど一緒にやっている、係長の碓氷だ。年下ではあるし、口調や空気感こそ穏やかではあるが、しっかり仕事をこなす碓氷を俺は信頼していた。そんな彼に指摘され、さすがに態度を改める。

「あ、いや、悪い。SIMURA製品を見ると、どうもイライラして」

「え～？課長は買ってないんですか？いいですよおSIMURAのグッズ。新作のリングも欲しかったんですけど、争奪戦に負けちゃって心もちんちんも萎え萎えなんですよね」

「商売敵の製品を喜んで買うな！」

「でも普通に興味わきませんか？煽り文句が絶妙っていうか。アダルトグッズだし、奇抜な製品なのになんかお洒落な感じで買いやすいし。売り方が上手いですよね」

「まあな。それにプラスで、商品開発部が束になっても解析できない性能なんだろう？技術者を引き抜かない限り真似できないし、情報のひとつもまわってこない。売り出し方も大したもんだけど、SIMURAグッズは製品そのものが強すぎる。正直、勝ち筋がひとつも見えてこねえよ」

ふう、と俺が息を吐くと、同じような重みのある息を碓氷も吐き出す。俺ら役付きが手も足も出ない程度には、売り上げ促進に関して息苦しさがあるのは事実だった。だが、そこは仕事のできる碓氷だ。彼は彼なりに、打開策を考えてきたらしい。

「確かに課長の言う通り、商品力で負けてるのは仕方ないでしょうね。でも、種類は圧倒的にうちが上ですから。見せ方次第で、多少なりとも売れる見込みはあるかなと僕は思いますけど」

「まあ、グッズのバラエティはうちの方があるけどな。でも、それをどうアピールする？」

「開発の次に、自社製品の知識があるのは僕ら営業ですから。SIMURA社は自分たちの顔出しをしませんので、僕らは逆に社員側が顔出ししてPRしたらどうかなと」

「なるほど。確かに信ぴょう性はあるかもな。で、どんな感じでPRするよ」

「大量にある商品を組み合わせ、あるテーマに沿ったセット売りをしたらどうかなと思ってますよね。その使い方をレクチャーしつつ、感想も言っていくみたいな。いわば体当たりレビューで客を稼いでいくのはどうでしょう。自分たちで使用するところを、動画で撮ってみたらいいんじゃないかと」

「は！？使うってお前、売ってるのはこんなんだぞ」

けれども、碓氷の提案は納得感はあるけど、納得したくない内容のものだった。彼の言う通り、自社商品を使って動画で紹介すれば、商品説明としては分かりやす

い。写真だけでは売れない洗剤が、頑固な汚れをするりと落とす様子を実演したら売れるように、魅力の伝え方で売れ行きは大きく変わる。

とは言っても、俺たちが販売しているのはアダルトグッズ。机の傍らにあるのは、バイブやローター、そのほか明らかに不健全な玩具だ。これを実践で使うだけならまだしも、動画で撮られるのはキツすぎる。

「体当たりでPRするって案には賛成だが、俺は無理だぞ。特にやられる側は死んでもやりたくない」

「ええ、それはもちろん。課長だけではなく、大概の人は嫌だと思いますので。ここは若手に頑張ってもらおうかなと」

「若手？もう候補にあてがあるのか」

「はい。SIMURA社は飛ぶ鳥を落とす勢いですので。1日でも、1時間でも早くことを進めていくべきです。実はもう準備はしてありますので、一旦場所を変えましょう」

しかし碓氷は、最もハードルの高い部分を既にクリアしていたらしい。まさか若手の有志が、損な役回りをもって出てくれるとは思わなかった。なるほど、いい気合いだ。やはり営業は負けん気がなくてはいけない。まだまだこの会社も捨てたもんじゃないなと思いながら、俺は碓氷に案内されるままに、普段は会議に使用するスペースへと移動した。

しかし、ガラスで内側が見える作りになっている部屋には、外から見ても丸わかつきの男が一人、机の上に拘束されて暴れていた。外部からでも分かる物々しさに、俺はぎょっとして足を止めてしまう。それをなんとも思っていない碓氷は、俺を置き去りにして会議室のドアを開けた。防音機能が優れていて聞こえなかったが、ドアが開いた瞬間、中から悲痛な叫び声が聞こえてくる。

「あっ、ちょ、碓氷さん！マジ最低ですから！普通この状態で人間を放置していただきますか！？俺、めっちゃ色んな人に見られたんですけど！」

「何言ってるの。これから世界中の人に見られるんだから、会社の人が見たくらいで騒ぐんじゃないよ」

「その発言がもっとヤバいんですよ！人でなし！期末の上司評価の時にボロカス書きますからね！」

「鬼ヶ原課長、そんなところに立ってないで早く入ってください。鍵閉めますんで」

「あ、ああ…」

異常な光景と音声に立ち止まっていたが、碓氷はあくまで普段通りだった。それに、他の人も聞いている中で騒ぐのも良くない。足早に部屋に入ると、碓氷が部屋のドアを閉めた。

会議室内には、碓氷と俺。そして、見たところ営業の若手である峰平がいた。ただし峰平は、ワイシャツとパンツだけを着せられており、手足を拘束されている。彼の自由を制限しているのは、弊社の売れ筋製品の一つ「初めての人から玄人まで使える☆簡単SM拘束ベルト」だ。太ももに装着するベルトには、手首も



拘束するベルトの輪がついていて、これで手の自由を制限することができる。そして足も、腰に巻いたベルトと太もものベルトが繋がれるので、こちらも自由を制限できる。このベルト単体でも、場所を選ばず簡易的に拘束が楽しめるし、他の鎖やロープと繋げることも可能な金具もついているので、もっとマニアックなプレイに使用することができる点も高評価を得ている。省スペースに保管が可能で、有名なAVでも使ってもらうことがある、弊社のSMグッズではダントツに人気の商品だ。

早速これを使っているのかと、俺は啞然としながら峰平を見た。そして峰平は、俺を見て顔を真っ赤にしながら首を振っている。そんな俺たちに見向きもしない碓氷は、スタスタと部屋に置いてあった大きなバッグの方へと向かっていった。

「はい。というわけで事前準備が済んだ、活きのいい若手をご用意しておきました。さっそくですが、時間もありますので彼と一緒に動画を撮っていきましょう」

「嫌です！嫌ですよ俺は！まだ了承してないっすから！」

「う、碓氷。峰平は嫌がってるみたいだが...？」

しかし玩具を机の上に広げていく碓氷とは対照的に、峰平は心の底から嫌がっているように見えた。碓氷から説明を受けたとき、てっきり俺はやる気のある若い社員が「今日はよろしくお願いします！」と挨拶してきて、それから共に準備を進めるものだと思っていたんだが。未だに状況がつかめない俺の前で、二人の言い争いは続く。

「いえ、嫌がってても関係ないですから。峰平にもさ、さっき説明したでしょ？  
今うちの会社は逆境に立たされてるの。乗り越えるには犠牲が必要だから、元気  
のある有志が欲しいって皆に言ったはずだけど」

「へえ、そうだったんすね？でも俺には、今すぐグッズのレビュー動画撮りたい  
から、とりあえずケツ貸してくれる奴って誰かいない？って聞きましたけど  
ね！？いるわけないですから！イカれてるようちの上司は！」

「ジャン負けの結果でしょ。雑魚な自分の責任を僕らに押し付けないで。あ、  
じゃあ課長、今日はコイツで試していきますんで、カメラ設置していきましょう  
か」

そして彼らの会話の中で、なんとなく流れが読めてきた。どうやら峰平は、罰  
ゲームに近いかたちでこの場所に招集されたらしい。それを不憫には思うが、確  
氷のアイディア自体はとてもいい。かわいそうではあるが、玩具を使うには誰か  
の尻が犠牲になるのはやむを得ないところだ。ここはひとつ、峰平に生贄になっ  
てもらおうとしよう。

峰平からすると、言いだしっぺの確氷に対する信頼がない分、助けを求める対象  
は俺になるはずだった。しかしその俺までもが、確氷と意見を出し合いながらこ  
とを進める様子を見て、なぜだ、そろいもそろって人でなし、コンプラが狂って  
る、と喚いていた。すまない峰平。俺にも達成したい目標がある。お前の役回り  
を不憫には思うが、変わってやることはできない。

机の正面にカメラを設置した俺たちは、テスト用に軽く録画をして、自分たちの  
位置などを確認した。大体の構図ができたところで、流れについての話し合いに  
移っていく。

「で、やるには良いんだが。どんな感じで撮るつもりんだ？」

「本日の撮影内容としては、性的に無知な男でも、弊社の製品にかかれば余裕で中イキできるようになりますって感じです」

「...いや、碓氷。それはさすがに無理があるだろ」

「大丈夫です。僕、家に何匹か飼ってますし。飼ってたのを別の飼い主にあげたこともありますし。仕込みも調教も得意ですので」

「か、飼ってる？それって犬とか猫とかそういう、ブリーダー、みたいな」

「はい。大きなワンちゃんみたいなものですね。頭が良い子は、自分で散歩に行き、自分で帰ってきて、僕の分のご飯も作ってくれて、掃除もしてくれるんです。おつむが足りない子は時々粗相しちゃいますけど、躡れば待てるようになります。僕が言うまで我慢できるようになるんですよ。どうですか？かわいいでしょ？」

「そう...、だな、うん。ペットはいいよな、はは、ははは...」

だが、碓氷の話す無茶な内容と、彼のほの暗い私生活を垣間見てしまい、様々なショックで乾いた笑いが出た。衝撃が大きすぎて、大事な企画の部分がまるで頭に入っていない。飼っているのは、おそらく犬や猫の類ではない気がするが、これ以上彼のプライベートに立ち入るのはやめておこう。そして今後はなるべく、碓氷から興味を持たれないように生活していきたい。

だが、こんなにも不穏な話をしているのに、峰平から文句が聞こえてこない。変だなと思って彼を見ると、先ほどより全身赤くそまっているのに、なぜか大人しくなっていた。ふ、ふ、と吐いている息も、心なしか苦しそうに見える。

「峰平？どうしたお前、なんかしんどそうだな？」

「ッ！？や、そ、そんな、ことは」

「へ～、ピーピー言ってた割に、もうしおらしくなっちゃうんだ。まあいいや。鬼ヶ原課長、準備もできてますし、そろそろ始めましょう。基本的には僕が話して進めていくので、課長は玩具を使ってアシストする感じでお願いします。僕の説明から入りますので、課長は最初カメラ側に立って、録画ボタン押してください。録画が始まったら合図ほしいです」

「分かった」

けれど峰平の変化に関して、碓氷は何か思い当たることがあるようだ。それが何かは分からないが、俺は碓氷が指示する通り録画ボタンを押して、手で彼に合図を送った。すると碓氷は、長机に転がる峰平の上半身を起こして、普段と変わらぬ口調で話し始める。

「今回皆様にご紹介するのは、弊社自慢の商品の数々です。初心者向けから上級者向けまで幅広く揃えた中から、今日はパートナーや自分の開発にピッタリの商品をおすすめさせていただきます。彼はちなみに、初めてではないですがほぼ未経験の若手社員です。性的にはノーマルに近いですが、弊社製品にかかれば一晩でお尻でオーガズムを迎えられる身体にすることも可能です」

しかし撮影に携わる俺でさえ、碓氷の言うことに疑問を感じる。大丈夫なのか、そんなに過剰な煽り文句を言って。最近では大げさな表現をすると、過度に消費

者を搔き立てているとして問題になることもあるのに。ちょっとの演技くらいはともかく、モロの嘘は気づかれるんじゃないかとひやひやする。

そんな心配を抱える俺をものともせず、碓氷は峰平のシャツのボタンを開けていった。峰平は身じろぎをしながら嫌がっていたが、手も足も使えないので、あっという間に上半身が露出する。そこで俺も初めて見たが、彼の片方の胸には既に、白くて四角いシールが貼ってあった。

「彼の胸に貼っているのは、弊社が特許を取った最初の商品の『部分開発シート【乳首用】』です。乳首に貼り付けていただくと、約30分ほどじんわりと温くなる仕様で、体温とシートの熱で、徐々に媚薬の練り込まれた薬剤が溶け出していきます。長い日数をかけずとも、乳首で絶頂できるくらい感度を上昇させることを可能にしました。シールを貼った場所は最長で約2日間ほど敏感になります。貼る時間に応じて効果は調整できますので、初めてで不安な方は、10分ほどではがしていただくことをおすすめします。ちなみに今は、貼りつけてから30分ほど経過した状態です。どんな感じか、本人から感想を聞いてみましょう」

峰平の右乳首に貼ってあるのは、碓氷の説明した通り、貼ったところを敏感にするシートだ。見た目は地味だが結構強力で、遊び半分で使うと泣きを見る製品として恐れられている。そんなものを序盤から使って大丈夫なのかと肝が冷えた。しかも碓氷ときたら、ここで峰平に感想を求めている。鬼だ。無茶ぶりがすぎる。

峰平も、いきなり自分にふられて戸惑っていた。しかもやられている側の感想なんて、言いにくいに決まっている。だから彼は、碓氷の方を見てもごもごとカメ

うに届かない声で言い淀んでいた。けれど、碓氷がぼそりと峰平に何かを耳打ちすると、ビクッと峰平の肩が跳ねる。碓氷の声を聞いてから態度を改めた彼は、カメラに向かって感想を述べていく。

「そ、その…。貼ってる部分はあったかいけど、むずむずする、みたいな感じです」

「とのことですよ。はい、それではこちらのシートをはがして、左と右でどれほど違いが出たか見ていきましょう」

「ひっ、んん！」

しかし感想を述べたからといって、碓氷のペースは崩れなかった。あくまで彼の都合で話は進んでいくので、無遠慮に乳首に貼ったシートが剥がされる。ただし、言ってもシートが剥がれるだけだ。それでもつい声上がるほどに、峰平は高まっているように思う。温感があるせいで、血行が良くなった乳輪の周辺が赤くなっているのが、なんとも卑猥ではある。

部分用開発シートが貼られていたのは、峰平の右の乳首。左は素の状態になっているので、碓氷はまず左側の乳首を軽く抓った。

「では、まずは何も貼っていなかった左側からですね」

「う、ん、んっ！」

「はい、まあ彼は特に乳首の開発もしてませんし、基本はノーマルな子なので。感じはするようですがこのくらいですね。では、右側も同じように刺激していきましょう」

「や、あ、まって、待ってください...！ちょっと待って、右はまだ」

「ほら逃げないの。右乳首もきゅってしようね」

「あっ、あゝ ううっ！！！！？」

そして右の方も同様に抓ったが、まるでやらせをしているかのように峰平がよがり始めた。あまりにも劇的な変化に、峰平もグルで演技をしているのではないかと疑ってしまうくらいの違いだ。それでも、右側をしつこくひっかく指先から必死で逃げようとする彼の動きは真に迫っている。しかも逃げる割には、あられもない声が駄々洩れだ。

カリカリ、カリカリと、身を振っては指を遠ざけようともがく峰平をいなして、碓氷は念入りに乳首を刺激する。時につまんだり、押し込んだりすると、身体を硬直させて感じ入る峰平を見ていると、まるでAVでも撮影しているかのような気持ちになった。

「ふぐっ、う、ん、んゝ ～～～～ッッ！！！！はあ、あ、や、やっ、だめ、乳首ダメっ、ひっ、しないで、やあ、あああっ！」

「ご覧の通り、飛躍的に感度が上がっています。ちなみに直接触れる分には、触れた手の方も拭けば問題ないのですが、はがした直後にすぐ口に含むのはおすすめしません。付着している媚薬を軽く拭きとってから舐めるようにお願いします」

「ふあああっ」

だが、光景は見慣れない物であっても、これはあくまで実演販売のようなもの。商品説明をする碓氷の声を聞くと、どこか冷静になる自分がある。その反面、ウェットシートで乳首を拭かれたただけでも感じる峰平を見ると、自分は何をしているんだろうと現実逃避したくなる。けれど、若手社員と部下が身体を張っている。ここで上長の俺が止めるわけにはいけないので、黙って撮影を続けた。

「はい、拭きとるのはこんな感じで大丈夫です。では、試しにシートを貼っていた方の乳首を舐めてみましょう」

「ッ！！？や、やだやだやだっ！舐めるとか聞いてないっす！」

「今言ったけど」

「遅いでしょ！？どう考えてももっと早く言うべきだと思います！俺の乳首が変になったらどうしてくれるんすか！」

「変になりそうって予感がしてるんだ？ちょっと触ったくらいでビビっちゃって。かわいいね」

「ちっ、が、そ、そういうのじゃ、は、あゝ————…ッッ！！？」

しかしながら、峰平の参加理由は大分ネガティブだ。有志というよりは、敗者としてこの場にいる。撮影が始まったといえども、碓氷に好き勝手されるのに納得してはいないらしい。だから彼はガチャガチャとベルトの金属を鳴らすほど嫌がっていたが、拘束されて手も足も出ないので勝ち目はない。机の右側に回った碓氷は、ためらいなく峰平の乳首に口を付けた。

ぱくりと咥えた後、峰平の乳首がどう舐められているのかは、正直レンズ越しには上手く見えない。ただ、瞬間的に峰平が大きくのけぞったことや、逃がさない



とばかりに碓氷が上半身を抑えてからは、更に激しく峰平が喘ぎだしたことだけは分かる。

「んんんああああダメダメダメええッッ！！！！やああっ！ッ、ひ、吸わな、あ、ひ、いいいいっ！！」

「ほら、喘いでないで感想言って。これレビュー動画だよ」

「んぐっ！む、り、も、あああっ！！ぎもち、くて、無理いいいいっ！！」

「情けないなあ。ちゃんと言えるように、先に教育しとくべきだったか」

「ッ、あゝふ.....ッッッ！！！！」

ビク、ビク、と机の上で悶える峰平の感じ方は相当なものだった。碓氷は呆れているが、ここまで追い詰めておいて喋れと言う碓氷の方が狂っていると思う。だがお仕置きだとばかりに碓氷が乳首を軽く噛むと、今までで一番大きく峰平の身体がつっぱった。そのまま、へなへなと碓氷に身体をもたれてしまう。

「う、は、は、あ...っ」

「ご覧いただけましたでしょうか。このようにノーマルな彼でも、部分開発シートにかかれば簡単に乳首イキさせることが可能です。とはいっても、こちらの商品は見た目以上にかなり強力ですので。乱用はご注意くださいね」

「んあ、あ、あ、ああ...！」

ぐったりと碓氷に体重を預ける峰平は、呆然としながら足を内側に曲げようとしている。ベルトに阻まれてうまく内股になれてはいないが、彼の下着は部分的にしっとり濡れだした。なぜ濡れたかは、言わずもがなだろう。

すごすぎる。ヤバい商品とは聞いていたが、これほどの威力とは。しかもイッたあとも、碓氷から乳首を軽く撫でられる度に、ぴく、ぴく、と身体を跳ねさせては声が上がっている。おいおい、どうなっているんだ。さっきまでは俺たちを激しく恨んでいた男だぞ、そいつは。あんなに勢いのあった若手社員が、あっという間に目をつむって喘ぐ色っぽい男に変わってしまった。

それは、本当にわが社の商品力によるものなのか？それとも、碓氷があまりにも手練れなのか？分らない。いや、前者であると思っていた方がいい。そうだと世間にも思ってもらった方がいい。そう、そうだ、うちの商品は凄いんだ。だってほら、キャンキャン吠えるだけだった峰平が、今やすっかり大人しくなっているじゃないか。

「ちなみにこちらの商品、乳首用のシートではありますが。もちろん他の部分に貼っても効果があります。ですから、あえてマニアックな場所を敏感にして、羞恥を楽しむのもおすすめです」

しかし強引に自分を納得させたいのに、言葉と一緒に足の付け根や首を撫でてから、カメラに目をやる碓氷の仕草が、どう見ても一朝一夕で身に着けたものとは思えなくて苦しい。なあ、お前本当に今日が初めての撮影なのか？色々慣れ過ぎていないか？あと、貼ったことあるんだろ。お前の家の「犬」たちの、首とか鼠径部に。それで羞恥プレイを楽しんだんだよな、きっと。

とんでもない怪物が身近にいたことに、俺はどんどん恐ろしくなる。けれど、一人だけ日常を歩む碓氷は、机の上に広がっていた部分開発シートを手にとり、粘着部分を覆っていたシールをはがしている。貼り付けるのはもちろん、峰平の左乳首だ。

「右だけじゃあバランス悪くなるし、こっちにも貼ろうね」

「ひっ！？い、いやだっ、いらない、もういらない」

「暴れたら他のところにも貼っちゃうけどいいの？ここにまだまだいっぱいあるからなあ、シート。手首とか足首に貼るとね、腕時計や靴下が擦れたりしても感じて楽しいから、やってみようか？」

「ッ...！か、勘弁してください、そんなの嫌っすよお...」

「そう？なら左乳首だけで許してあげる」

「うう...」

ずび、と鼻をすする音が聞こえた。峰平、お前は頑張ってるよ。碓氷からあんなことを言われたら、誰だってそうなるよ。かわいそうに、右乳首だけでなく、左側にもシートが貼られてしまった。これから2日間は、乳首に気をつかった生活を余儀なくされるだろう。

一方で、乳首を敏感に育ててご満悦の碓氷は、さっさと次の商品の説明に移ろうとしていた。切り替えの早い彼が手に取ったのは、弊社の商品の中では男女共に人気の商品、スティックタイプのバイブだ。

「では、ここからはお尻の開発にうつっていきますが。乳首は引き続きこちらの商品で刺激して、感度を高めていこうと思います。使用するのはこちらのスティックタイプのバイブです。上部の小さい突起は、細かな部分を刺激することに特化しており、反対側の太い部分は膣やアナルに挿入が可能です。突起の部分で性感を高めてから、バイブで大きな刺激を与えると、より深い快感を得られる商品となっております。では、僕はお尻側の開発をすすめますので、乳首開発は他の方に手伝ってもらいましょう」

だが、俺がバイブの説明に気を取られていると、ちょいちょいと碓氷に手招きされた。部屋には俺しかいないので、彼が呼ぶのは俺だろう。碓氷に近づくと、彼が手に持っていたバイブを渡された。俺がやるのか？と渋い顔を見ると、彼は軽く頷き、自分は左側の机の方に回ってしまう。

マイペースな碓氷になんとも言えない表情を見せてしまうが、これはレビュー動画。既に映っている商品を、使わないわけにもいくまい。使用前に不具合を確認するために、スイッチのオンオフと、全10種類の振動をチェックする。それを見つめる峰平の目があまりにも悲壮感に溢れていて、さすがに同情してしまう。すまんな峰平。これも仕事だと割り切ってくれ。

「そ、それもヤバいやつじゃないですか...！なんで冷静に動作確認してんすか、やですよ、乳首はマジで終わってますから！」

「やられるのがアイツじゃないだけマシだと思えよ」

「そのヤバい人は、もっとヤバいとこ弄ろうとしてるじゃないですか！バイブ使ってないで助けてくださいよ！」

「キャンキャンうるさいよ。ほら、君はカメラ見るか、いっぱい感じるか。もしくは感想を言うか。それ以外、無意味な口は閉じときな」

「ひ、ひどすぎる…」

がっくりと肩を落とす峰平の背を、トントンと励ますように軽くたたく。その程度で気力はわからないだろうが、俺はどちらかと言うと峰平の味方ではある。ただ、そうは言いながら乳首に容赦なくバイブを当てたので、おそらく彼から恨みはかっただろう。

そして左側に回った碓氷はというと、なんと峰平の下着をハサミで切っていた。なんの前触れもなく裁ちばさみを使う彼を見て、お前は本当に無茶苦茶だなと冷汗を流す。切ってしまうぐらいなら、最初から脱がせてやったらよかったんじゃないか。今度峰平には、詫びと感謝を込めて下着を贈ってやろう。

だが、彼の下半身を覆っていた布がなくなると、峰平の孔から何かが出ているのが見えた。シリコン製の輪が見えた時、俺はぎょっと目を開いてしまう。いや、あの輪はもしかして。いや、もしかしなくとも。

「はい、それではお尻の開発をしていくわけですが。やはり弄る前には、拡張の手間がありますね。それを簡単にかなえてくれるのが、既に彼に入れてありましたこちらの商品。全貌が見えませんので、一度全部出して見てみましょう」

「っ、まっ、ゆ、ゆっくり！ゆっくり出しっ、〜〜〜ッあゝ ああああ  
あっっ！！！！？」

説明を開始してすぐ、碓氷は峰平から出ている輪を遠慮なく引っ張った。すると、中に入っていたものがずるんと抜けてくる。彼から出てきたのは、いわゆるアナルボール。大小のサイズが異なる5つの球体が繋がるそれは、抜き差しするだけでも刺激があり、ゆっくりとプレイを楽しめるグッズでもある。

ただ、峰平から出てきたものを見ると、複数展開しているサイズの中の上位のランクのものに感じる。お前、やだやだ言いながらもずっとコレを入れられていたのか。見えない下着の内側に隠されていた秘密を知り、つい手に力が入った。すると強く乳首にバイブが当たったせいで、ビクンと峰平の身体が跳ねる。同時にヒクついたであろうアナルも、カメラにはしっかり映っただろう。

「こちらは弊社の中でもロングセラー商品のアナルボールです。サイズは複数種類がございまして、今回は上から2番目の大きさのものを使用しました。初めてのアナル開発の場合は、もっと小さいものを選んでも良いかと思います。見た目は重くどっしりしていますが、シリコン製で中を傷つけにくくなっていますので、デリケートな場所でも安心してお使いいただけます。入れたままでも内部をしっかり刺激してくれますし、入れて出してを繰り返しても快感を得られます。今回は彼のアナルを広げるために、約1時間ほど入れておきましたので、大分中はほぐれているかと思います。指2本は余裕そうですね」

「んんんううッ！」

ボールについていたローションの名残を手には纏わせて、碓氷はずぶりと2本の指を内部に入れた。確認するように彼の中をかき混ぜると、峰平はベルトを軋ませ

ながら抵抗する。だが嫌がってはいても、しっかり慣らされた後だ。ずっぽりと指を咥えこむ孔は、誰が見ても欲しがって口を開けているようにしか見えない。そんな彼を見て、準備は出来たと判断したのか、碓氷は一度指を抜き、机にあった別の商品を手に取った。

「ひう、ッ、あ、ゃ、やっ、んんっ、んんん！」

「はい、しっかりほぐれていますね。では、次はこちらを使って感度を高めていきましょう。僕が今手に持っているのは、吸盤型の前立腺開発グッズです。見た目は小さくかわいらしいですが、前立腺に直接貼って、はがしてと繰り返すうちに、どんどん敏感に仕上げていける優れモノです。ただ、こちらは根本的な感度を底上げしてしまいますので、戻れなくなるほどの使い過ぎには注意です。では、こちらを使ったらノーマルの彼でもお尻でイクことができるのか。体当たりで検証していきます」

碓氷が手のひらに乗せているのは、ショッキングピンクの色の、ゴルフボールを半分に切ったような吸盤だ。ある社員が、「縁日とかで見かけるおまけの玩具を、壁や床に貼り付けるのではなく、前立腺に貼り付けてみたらどうか」と企画会議で言ったのをきっかけに開発が進んだ。実在する玩具から着想を得ているので開発はスムーズに進んだが、いざ使ってみると販売を悩むくらい効果があったため、地味な見た目以上に威力のある商品だ。ただし外観に華がないからか、売り上げは伸び悩んでいる。

しかし玩具の実力を知っている峰平は、説明の途中で短い悲鳴を上げ、大きく首を左右に振っていた。どうやら彼は、この商品がどんなものか知っているらし

い。勉強熱心な姿勢には感心だ。だが、知っているなら尚のこと、試してもらわないと困る。売れ悩んでいるものこそ、レビューする価値があるのだから。

「ちょっ、それ使うんすか！？無理っす無理っす！レベルが高すぎる！」

「おい、暴れるな。アイツの手元が狂うだろ」

「課長はもっと他に考えることないんすか！？てか、普通に使おうとしないでくださいよ！『POPにIN！前立腺カップ』でしょそれ！適当に使った同期が、めっちゃエグいって言ってたやつじゃないですか！」

「へえ、ちゃんと自社商品を試している子もいるんだ。優秀じゃん、うちの若手。じゃあそんな彼にならって、君もどれくらいヤバいかを検証しようね」

「そ、そんなっ...！嫌です、なんでじゃんけんで負けただけでそんなことまでっ」

「.....ねえ。さっきからガタガタうるさいんだけど。あんまり我儘言うなら、一生お尻でしかイケない身体にしちゃうけどいいの？」

しかし玩具に恐怖を抱く峰平は、全くじっとしてくれなかった。俺に乳首を刺激されても、碓氷が押さえても、嫌だいやだと暴れるばかり。拘束はしているが、カメラにほどよく映ってくれないと困るので、どうするかと気をもむ。けれど、そんな時こそ躰のプロの出番だ。碓氷が冷たい一言を放てば、峰平の動きは一瞬で凍り付いた。さすが碓氷、過去に何匹も躰けてきただけはある。なんなら、俺すらひやりとした。彼の目は笑っていなかった。脅しではなく、本気を感じさせる物言いをしている。



峰平が大人しくなると、彼はにっこり笑って良い子と頭を撫でていた。こうやって犬たちを手なづけたんだと、碓氷の手法を見て学ぶ。

「はい、では彼が大人しくなりましたので始めていきましょう。こちらのカップは吸着力がありますので、ローションをたっぷりつけても安心です。使うときのコツとしては、前立腺を覆うようにつけるとより効果が高まります」

「ん、んんっ！」

静かになった峰平のなかに、カップを2本の指でつまんだ碓氷の手が入っている。もう峰平の中の把握は済んでいるのか、少し探りを入れると、彼はぐぐ、と中で何かの動作をしてから手を止めた。そして碓氷の動きが落ち着いた瞬間、峰平の身体が大きく反り返る。

「ッ、うあああうっ！！？」

「はい、ちょうど今、彼の前立腺に貼り付けました。どう？吸われてる感じはある？」

「はひ、い、な、なんか、なんかくっつい、て、あ、や、取って、なんか変でっ」

「なるほど、しっかり張り付いているようですね。ちなみにこちら、貼ってはがしてを繰り返すことで敏感になっていきますが、貼り付けるだけでも気持ちがいい商品になっております。彼にはもう少し、貼ったままの状態を楽しんでもらいたいでしょう」

「や、だ、も、もういい、も、あ、んうううっ！！！！？」

前立腺カップが上手く張り付いているのか、碓氷が指を抜いても、峰平は一人で悶えていた。彼を感じるシーンの撮影になったようなので、俺もアシスタントとして役割をまっとうする。まだスティックタイプのバイブの振動を1パターンしか試していなかったの、スイッチを操作して色々変えてみた。何個目かで峰平の反応が良くなるものを見つけたので、そこでパターンを固定して強く押し当てる。

「んひ、い、いあ、あぁううっ！だ、め、これやだ、乳首だめ、もうだめえっ！」

「あ、振動パターン変えた感じですか？やっぱり刺激が変わるだけで反応もよくなるものですね」

「ん〜、どうだろう。元から敏感になってるからな、コイツの場合。あと普通に、前立腺カップのおかげもあるかも」

「なるほど、色々使うせいで、逆に一つの商品の性能が上手く説明できなくなるデメリットもありますね。まあこれは、次回以降の課題にしましょう」

「は、あう、うう、ゃあ、やめ、でっ、も、あ、あんううっ！！」

あくまで仕事のひとつであると認識している俺たちは、商品を使用しながら淡々と峰平を責める。俺はバイブで的確に乳首をこね回して、碓氷はあえて内部を意識させるように、下腹部をゆっくり撫でていた。彼にいたっては部分用開発シートを貼り付けている左乳首も、シートの上から引っかいていたので、峰平は必死に身を振って逃げようとしていた。

とはいえ、両乳首のどちらも責められているので、左右に身体を振っても無意味だ。しかも中に入っているカップに関しては、俺たちがどう責めようと、外さない限り自動的に彼の感度を高めてくれる。そう思うと、拘束具とカップの相性はいいなと俺も感心してしまった。

「ちょっと過激ではあるけど、相手を強引に調教したいときは、動けなくして前立腺カップを使うって考えはかなり理にかなってるな」

「おお、課長はやっぱり見る目がありますね。そうなんですよ、これだと自分で外せませんから。ですが、縛っていてよかったと思うのはこれからです」

けれども、碓氷が見ている未来はもっと過激らしい。かつて見た事のないほど楽しそうでもあり、そしてサディスティックでもある笑みを浮かべた碓氷は、腹部にあった手を下に移動させ、峰平の中に指を入れた。は、と峰平は息を飲んで首を振る。おそらく碓氷の指は今、前立腺カップに触れている。

「さあ、それでは少し時間も経ちましたので、さきほど取り付けたカップをはがしてみましょう」

「あ、あ、ま、待ってください、怖い、それ、こわ、んゝ ひiiiiiiiゝ いゝ いいッッッ！！！」

碓氷の指が軽く動いた後、ペコ、と音がしたような気がした。その音とリンクしたかのように、峰平の身体がバツンと大きく跳ねあがる。勢いが強すぎて、慌てて俺が押さえないといけないくらいだった。おいおいなんか挙動がおかしかった

が大丈夫なのかと、俺にもたれて痙攣する峰平の顔を覗けば、全く焦点が合っていない。

「はひ、ひ、ひうっ」

「今、軽くイッてたか...？」

「みたいですね。ご覧いただけたでしょうか。先ほども申し上げましたが、彼は基本ノーマルですし、前立腺は未開発です。それでもこの前立腺カップをうまく使えば、アナルでの絶頂を迎えることも可能です。もちろん追加で使っていくことで、更に敏感にすることもできます。では気になる方のために、もう一度取り付けてみましょう」

「んぎうっ!？」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー